

の怠け心が抜け切っていない。ほっとできる時間ばかりを追いすぎて、いつしか毎日がほっとしてしまふのである。生徒の顔を思い出せば、「あんちくしょうめ、もつと勉強せんかい」「ようし、よぐやつたべ」と、ついつい余分な事を考えている。そして、明日の授業の段取りを忘れ、朝になってあたふたしているのである。

前書きが長くなったが、私は、暇つぶしの時間が好きである。緊張した場面もそうはいなくせに暇つぶしとはおかしな話だが、私にとつては明日への活力の場であり、段取りを考える場でもあるのである。大学生の頃の恩師に「おまえは弓のつるが緩んでばかりいる。時には必要だがもう少しピンと張れ」と言われたのが忘れられない。しかし、どっぷりとつかつたその時こそ、エネルギーの充填なのだから一向に気にしない。

いつの頃からか忘れたが、自然の良さというか自然の偉大さすばらしさがあるとなくわかるようになった。他人に言つてわかるものでもないが、また他人から聞いて理解できるものでもないが、一人自然の中に没頭しているその時が己れの時間として感得できる唯我独尊的発想を持てるようになった。自己満足ととらえればそれまでだが、生活の中の効用として、そして、明日への糧の一つとして没入する自分を見るのである。現代社会を唯物の世界と発言した思想家がいたが、なればこそ

心の社会を欲したいものである。慣れ過ぎた人間社会を、マシーンの発想を避けるためにも、である。

忙中閑ありとはよく言われる言葉だが、人間の心を忘れないうために、私は明日への糧を探つていきたいと考えている。つまりは怠け心がむずむずしているのである。入口は狭くとも出口で大きく感じ取りたいと常々考えるのである。大したことじゃない、良く言えば自分を見つめ、さらに自分を生かす

花いろいろに

玄永牧子

例年になく早い春の陽射しの中に、シンビジュームの花が咲いている。光を背にうけると、花弁が透明に輝き、色に艶が出てくる。まるで、ルビーやトパーズを光にかざして見ているように、華やかで豊かな空間が広がる。

蘭といわれる仲間には、その数が、ざつと二万五千種あると、本に書いてあった。豪華なカトレアや胡蝶蘭は、西洋蘭の代表である。春先の野山に、一輪ずつの花をつける春蘭も、初夏のころ芝生の中などに、ねじのようによじれて細長く伸びた花茎に、小さな桃色の花をいっぱいにつけるもじずり

たいと考える欲を持っているだけなのかも知れない。また明日も、ほっとする時間をみつめるために考えを巡らしているのである。

(梁川町立梁川中学校教諭)



(ねじ花)も、鶉うすを連想させる湿原の鶉草もみな蘭の仲間に入るとか。よく見ると、カトレアからねじ花の小さな花の一つに至るまで、その花は共通の形をもっていて、外側の三枚の花弁が片の上に、それによく似た三枚の花弁がつき、そのうちの一枚が、とくに唇弁といわれるように、たると人間の唇か舌をべろりと垂れ下げたような、独特の形をしている。

同じ仲間でありながら、東洋蘭の楚々とした高貴な味わいは、西洋蘭のときには辺りを圧倒するほどの、見事な色と形の饗宴とは対照的だ。それぞ

れに、人を魅きつける美しさがある。それに、どんなに肥料をやり手をかけても、ねじ花は決してカトレアにはならないし、鶉草も胡蝶蘭には変らない。持つて生まれた遺伝子と、置かれた環境のもとで、鶉草は鶉草の花を咲かせ、ねじ花はその花をつける。

学校の生徒に、同じことを思う。どんなにたくさんの人の中にあつても、リーダーシップを発揮し、ひとときわ目立つて貴重な存在になる子もいれば、いつもひそやかに人の蔭にいなながら、目が輝き美しい笑みを浮かべて、クラスの大事な存在になる子もいる。本が好きで、マンガを描く子、いつも賑やかにしゃべっている子、スポーツが好きで、さりげなく教室に花を飾る子、もくもくと掃除に励む子、千二百人の個性が集まる学校は、さながら、色とりどりの花が咲く公園のように見えてくる。

手をかけ心をかけて育てた時のシンビジュームは、花はもちろん葉も、色といい形といい、それぞれの品種の特徴を備えながら、それぞれ見応えのあるものに育つ。寒い冬に根を痛めず、成長期の夏に十分な水と肥料を与え、秋に肥料を断つて少し寒さにあわせ、開花時に必要な温度と光があれば、どの鉢も見事な花をつける。ところが、やつと伸びた花芽をなめくじになめられたり、花をカイガラ虫にやられたり